
キミノトナリ

紅満 絢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミノトナリ

【Nコード】

N2916I

【作者名】

紅満 絢

【あらすじ】

「お前、俺と付き合いねえ？」

ほんとは分かってたよ

あの告白は…本気だったんだよね

ちゃんと返事出せなくて…

意気地なしでごめんね

告白

「- 空!!」

「ほえ？」

放課後

突然後ろからあたしを呼ぶ声がある

驚いて振り返ると同時に頬を詰めたい感触が伝った

「ひつ 冷たっ!!何？」

「缶ジュースでさア」

「もー総悟!!」

その当人は…沖田総悟

学校ではすつごくモテるくせに、何かとあたしに突っかかってくる

…所謂悪友だ

「そのジュースやりまさア」

「え マジで？」

「おうよ 200円な」

「げっ 金取んの？」

「冗談でイ」

まあ、良い奴であることに変わりはない…はず
だって缶ジュースくれたし

「オレンジジュース…かあ…総悟も案外子供だねー」

「文句あんなら飲むな」

「あはは ごめんごめん」

缶ジュースのふたに指をかけると「プッシュ」と新鮮な音を出す
一口飲むと、喉がひんやりしてすごく気持ちよかった
一口を付けた缶ジュースを額に当て、冷たさを実感しながら重い
肩を起こす

「そつえばさー」
「ん？」

隣に座ってる総悟があたしの顔を覗き込んでくる

「お前って…好きな奴とかいんのかイ？」
「…え？」

「好きな人…？」

「い、いないよっ」
「ふーん」

何よ突然

「じゃあ…さ、」
「ん？」
「お前、俺と付き合わねエ？」
「…!!」

・放課後の…ほんのりオレンジな教室
すぐ隣にいる総悟が

不思議と近かったり

「…あ えつと…」

「…」

「冗談…だよな？」

咄嗟の判断だったつもり

突然の告白に、驚いたのは本当でもあたしは彼の本気の告白を？冗談？と銘打った

今の関係を壊したくなかったし自分の気持ちなんて盲目だっただから…

「…お前エスパー？」

「あはは 総悟、冗談キツイよー」

「悪イ悪イ」

彼の返事には

安堵の気持ちとほんのり切ない気持ち

ほんとは分かってたよ

あの告白は…本気だったんだよね

ちゃんと返事出せなくて…
意気地なしでごめん

嫉妬（前書き）

自分の気持ちが分からないから…
あたしはまた一つ
自分に嘘をついた

嫉妬

結局

昨日のあの告白のせいでほとんど眠れなかった…

だって

初めて見たんだもん 総悟のあんな顔…

目が本気だった

だからあの告白は…

「空！」

「へ！？」

よりによって考え事してる時に突然後ろから声をかけられて。
驚いちゃって、ついはいしたない声を出してしまった…

「…総悟…」

「よう」

声の主は…当然の如く総悟だった

気まずくて顔を上げられない

こんな態度とって、総悟怒るかな…

「元気ねーなア 何かあったかい？」

「…何でもないよ」

「そーか？」

嘘。何でもないわけない

元気がない原因は…総悟なんだよ？

「元気ならいいんですア」

「あ、あのね総悟…」

「あ！！総悟君！！」

「へ？」

その声に反応してしまったのは
あたしの方だった

声のするほうへ視線を向けると、そこに立っていたのは多分同学年
の女の子
すっごく美人で、茶髪のウェーブが太陽に照らされてキラキラ光っ
て見える

「ゆき」

…え？

総悟…今何て？

「えへへ 総悟君おはよー」

「おう ゆきはいつも元気だなア」

「うん だってゆき、元気だけがとりえだもんっ！！」

「ハハッ 違エーねエ」

嘘…

総悟が女の子の事、名前で呼んでる…

うそ…何で？

「あ、そくだ！！ゆきね、機種変したの アド交しない？」

「いいですぜイ ケータイは？」

「えつとねえ…あれ？ケータイ忘れてきちゃった」

「お前は…ほんとに天然で困りまσα」

「ひつどーい！！総悟の意地悪く！！」

「忘れる方が悪いーんδα」

あれ…

何でこんなにムカムカするの…？

「だつてえ…」

「だつてじゃねーの」

どうして…総悟はその子にそんなに優しいの？

なんで…

どうしてこんなに切なくなるんだらう

「空?!」

「-え？」

ふと総悟に名前を呼ばれ、うつむいていた顔を上げると
首元に、一粒の雫が落ちる

その冷たさと空しさに涙だと悟る

あたしってば、何で泣いてるんだらう…

「何泣いてるんでイ!？」

驚いた表情の総悟

何で泣いてるのか…あたしにだつて分からないよ

「目に…ゴミが入ったの」

「取ってやりませア 目エつぶれ」
「ん」

そつとあたしに触れる総悟の大きな手が
妙に心地よくて

分からないから…

自分の気持ちが分からないから

あたしはまた一つ

自分に嘘をついた

嫉妬（後書き）

うーん…微妙だねq

総悟が総悟じゃないし！！

連載ってむずかしいよ><

ここまで読んでくださった方、ありがとうございました

盲目（前書き）

自分の気持ちが分からないから どうすることも出来ないの

総悟：

ごめんね

盲目

「空…保健室行くかい？」

あたしに尋ねる総悟の声は

心配が募って曇っていた

「…行く」

「送ってく」

「だ、大丈夫だよ…」

これ以上総悟に心配かけたくないのに…

「いいから ゆな！悪い、先行つてろ」

「うん…分かったあ」

そう言って背を向けてとぼとぼ歩き出す

彼女の寂しそうな背中が、やけに目に焼きついた

ゆなさんに悪いことしちゃった…

でも不謹慎かな

総悟があたしを優先してくれたみたいで

何だか嬉しいよ…

「空」

「ん？」

「鞆持ってやるから、かしなせエ」

「え でも…」

なんだか悪いな…

「何だでエ いつもなら？ラッキー？とか言って容赦ねーくせに」

「…」

「今日は変だな 何かあった？」

「…総悟」

「ん？」

なんで…こんなに優しいんだよお…

あたし ひどい事したじゃん

告白とか…なかった事にしちゃうし

今だって

泣いて総悟を困らせて

「総悟お…」

「どうした？」

「目、痛い」

「よしよし」

でも…ごめんね

自分の気持ちが分からないから とうすること出来ないの

総悟…

ごめんね

盲目（後書き）

ふうゝ
…

話がなかなか進みません。笑

バカ（前書き）

それは多分

総悟のせいだよ

バカ

「失礼します」

軽快な声とは裏腹に、保健室からの応答はない

「あれ 誰もいねーの？」
「…みたいだね」

先生のいない保健室は空っぽだった

「どうすっかなー…」
「も、戻る？ あたしはもう大丈夫だから…」
「ほんとに？」
「う、うん…」

後を引かない涙を必死でこらえ、引きつった笑顔で答えると総悟に頬をつねられた

「い…いったーいつ」
「嘘つけ」
「え？」

曖昧な頭を振れば手を離してくれる

「涙滲んでんじゃん まだ痛いんだろイ？」
「だ…大丈夫だよ！！」
「大丈夫じゃねーの やせ我慢は見苦しいぜ？」
「…っ」

なんだよー…

「ほら」

「…？」

「入れよ」

そう言ってこちらを振り向き、手を差し伸べてくれる

「…うん…」

一瞬…

ほんの一瞬だけ、手が触れる

トクン…

心臓が

いつもより早く鼓動を打つ

「ね、ねえ総悟！！」

「ん？」

「あのさ、昨日は…」

「あら？ 薄桜さんに沖田君 どうしたの？」

「…え？」

突然の声に振り向けば

何ともまあ間の悪い保健の先生

「えっと…コイツの目にゴミが入って 痛くてたまらなそうだったから保健室に連れてきました」

「そうなの… 薄桜さん、大丈夫？」

「あ、はい…」

…なんか、罪悪感

本当は痛くも何ともないのに…

「ほんとに平気？」

「…はい」

ごめん先生

ごめん、総悟…

「…じゃあ授業に戻りなさい もしまた痛み出したら保健室にいらつしやい」

「はい」

「空 戻るぞ」

「うん…」

軽くお辞儀をして教室を出ると

勇介が保健室のドアを閉めてくれる

ドアの閉まる鈍い音が何だかもどかしくて

「総悟」

「ん？」

「…ありがとう」

「なんだよ改まって 明日は初雪か？」

「バカ…」

本気で言っただのに…

「バカは余計だっつーの」

「バカだよ」

「…？お前さ、今日なんか変じゃね？」

「え？」

変…？

それは多分 -

「そんな事ないよ？」

「ならいーけど」

あたしが変だとしたら

それは多分

総悟のせいだよ

バカ（後書き）

話がまとまらない…

ここまで才能が皆無とはw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2916i/>

キミノトナリ

2010年10月10日07時55分発行